

▶▶▶加藤 裕治

戦地を伝える映像について

ロシアによるウクライナ侵攻から一カ月以上がたつ。この惨事を私たちは多くのメディアを通して目撃している。その中でも、注目されているのはネット、特にSNSの存在だろう。「SNSで見る戦争」といった表現も目にした。

既存のメディアとSNSを対比させすぎることにも注意しなければならないが、一般の人々が、次々と映像を投稿・拡散できる仕組みを持つSNSの映像が、戦争の伝え方を変化させているようにも感じる。

そもそも戦争が起るたびに、それを伝える映像も問われてきた。例えば約三十年前の湾岸戦争では、攻撃側の視点、例えばモーター越しに建築物だけが破壊されていくような映像がテレビで流された。そうした人間不在の映像は、戦場の現実から目をそらす、まるでゲームのような感覚で戦争を伝えるものとして批判された。

こうした湾岸戦争の映像に関する問題は、ベトナム戦争に由来する。ベトナム戦争では、傷ついた兵士や市民の映像が大量に撮影され流通した。米国の政権や軍部は、それらの映像が、反戦の機運を高めたと考えたようだ。そのため湾岸戦争では、徹底したメディア対策が行われた（藤田博司「アメリカのジャーナリズム」岩波新書）。

一方、今回の侵攻を伝える映像は、三十年前と比較して、多様化しているように感じる。例えば「空」からの視点だけでなく、「衛星」からの画像が、民間企業によって提供されるといったように。そしてSNSが、こうした多様な映像を瞬時に拡散する。真偽が曖昧な映像が検証されずに流通する危うさもあるが、統制されにくい側面もあるだろう。

だが今回、私に気になって仕方ないのは、例えば、現地の投稿者が崩れたビルの傍やがれきの間をぬって、ただ歩くといった映像だ。そこには爆発の光景といった、戦場を劇的に象徴するものは不在だ。しかしその映像が撮影されたことが、そこで日常を生きなければならない人の存在を伝える。ここにSNSの力を感じるのである。

（静岡文化芸術大学教授）